

Title	一九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン(I)
Sub Title	The function of Meidan in the 19th century Isfahan
Author	坂本, 勉(Sakamoto, Tsutomu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.367- 387
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東洋史 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0371

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン (I)

坂 本 勉

はじめに

レザー・シャアの都市近代化政策は一九三〇年代のイスファハーンにおいて Meidan-e Kohnah (『古広場』) の一部を取壊し、東西、南北に交差する Kheyābān (『大通り』) の建設というかたちであらわれた。

これに象徴される一連の道路建設事業は、イスファハーンの景観を伝統的なイスラム都市から近代的な都市へと脱皮させた。同時にこの都市形態上の変化は流通機構の中心がバーザールから大通りに沿ってつくられた近代的店舗に移るといふ結果を生じた。

イスラム都市の商業的側面を研究していくとき、バーザールはギルドとともに主要なテーマをなしてきたといっている。最近でもこれにたいする関心は依然として衰えていない。地理学、文化人類学の側からさかんに実態調査がおこなわれている。ただ、これらの調査はいずれも伝統社会がすでに変容してしまった現代イスラム都市におけるバーザールを直接の調査対象としている。⁽¹⁾ この意味で前近代のイスラム都市におけるバーザール固有の構造が研究されなければならないが、文献だけからそれを明らかにすることは現段階ではなお困難が多い。

メイダーンとはイランの都市にみられる広場のことである。これはイランの都市構成の上で建築史的にも流過程の上でも重要な機能になっている。本稿では最初にイスファハーンの地誌とマハッレについて触れ、ついで住民構成を述べ

(次号)、さらにそれとの関連でメイダーンについて考察することにする(次々号)。これによって最終的にはパーザールに収斂するイスラム都市の流通過程の一端を一九世紀のイスファハーンにおいて明らかにできると考えるからである。

一 イスファハーンの市域の変遷

(1) 第一期

アラブ征服の直前、イスファハーンは相互に離れた二つの独立した町——Yahudiyya と Jayy——から成っていた。前者は現在の市街の北東部にあり、アラブ史家はこの町の起源をバビロン幽囚の時代に求めている。後者は現在の市街から八キロメートル南東に行ったザーヤンデルド河に沿う町であった。建設時期はアレクサンダー以前に遡るとも、あるいはササン朝のホスロー一世(五三一—五七九)の時代であるともいわれる。現在は泥の破片だけが残るまったくの廢墟である。⁽²⁾

Jayy にはササン朝の総督のいる城砦が町の中央に築かれ、その北にある Khur 門の前に市のひらかれる広場 (meidan al-sug) があった。アラブがイスファハーンを征服すると軍隊を Jayy に駐屯させ、最初のマスジェドをこの町に建てた。⁽³⁾

七六七年、イスファハーンを中心は Jayy から北西の Khushinān 地区に移った。これはザーヤンデルド河の北に新しく建設された軍事都市 (misr) である。アラブの司令官 'Ayyub b. Ziyad はここを支配の拠点とし、フルサーン運河の岸にこの地方で二番目のマスジェドを建てた。

Khushinān の市街は、その後、北に発展して在来の町 Yahudiyya に接するようになった。この結果、Yahudiyya の南端に位置していた Meidan-e Kohneh (以下、「古メイダーン」と略記) が新市街の中央を占めるようになった。⁽⁴⁾ 七三年、古メイダーンの北西に三番目のマスジェド Masjed-e 'Atigh が建てられた。⁽⁵⁾

ブワイフ朝の 'Azd al-Douleh はアラブ支配期の都市プランを基本的に継承して、はじめて日乾レンガの市壁 (Barreh-ye 'Azd al-Douleh-ye Deilami) をめぐらした。このあと、イスファハーンを支配したセルジューク朝は、都市形態に大きな手直しを加えずに改造をおこなった。古メイダーンが整備され、北東隅に Qaysariyya のバーザール、Naq-qāreh-khāneh がつくられた⁽⁶⁾。一〇八九年、セルジューク朝のワジール Taj al-Molk の命令でマスジエドが拡張され、北側にドーム建築 (gonbad-e khāki) が増築された。古メイダーン周辺に現在、セルジューク朝期の遺構はほとんど残っていないが、古メイダーンが行政、商業、宗教などの諸機能の集中するところとして都市計画で位置づけられたことは確かである⁽⁷⁾。

しかし、セルジューク朝期までに形成された第一期の都市発展は、一二四四年のモンゴル軍の攻略、一三八七、一四一四年の二度にわたるチムール軍の来襲によって徹底的に破壊された⁽⁸⁾。

(2) 第二期

第二期の都市発展はサファヴィー朝期に始まる。シャー・イスマーイール (一五〇二—一五二四)、シャー・タフマースプ (一五二四—一五七六) の二人は、古メイダーンを再建、整備してその建築形態を確定した。北東、南東、南西にそれぞれ建てられたカーセゲラーン・マドラセ、同キヤラバンサライ、ハールーン・ベラーヤト廟、マスジエド・アリーはこれらの手になったものである⁽⁹⁾。

一五九七年、首都をカズヴィーンからイスファハーンに遷したシャー・アッバースは、この町の大改造に着手した。これは古メイダーンの南西に新しく Meidān-e Shāh (「王の広場」、別名 Meidān-e Naqsh-e Jahān ともいう)。以下、「新メイダーン」と略記) を建設し、これを市内の中核に据えて市壁、道路、種々の建築物を配置した。新メイダーンはポロ競技などで使うときを除き、通常、広場として空間のまま残しておかれた。周囲に次のような建物があった。すなわち、西に 'Ali Qapu の門があり、これがサファヴィー朝の宮廷建造物——Chehel Sotūn 'Hasht Behesht' 官衙など

の入口になっていた。東と南は、ロトフォッター、シャーの二つのマスジッドが配置され、北は常設店舗の連なる大バザール (*bāzār-e bozorg-e 'ām*) にあてられていた。

要するに、新メイダーンはシャー・アッバースの都市構想において行政、宗教、商業の諸機能を統轄する空間として把握されていた。サファヴィー朝期にイスファハーンは新旧二つのメイダーンを併存してもつことになり、この二つの空間を結ぶものとして大バザールが建設されたのである。⁽ⁱⁱ⁾

市街地が拡大、発展するにともなうて新たに第二の市壁が築かれ、これは *Baru-ye Tahmuri* と名づけられた (→附図I)。日乾レンガづくりであったが、町全体を取囲み、各所に門が設けられて主要道路がイスファハーンの市街地 (*shahr*) と郊外 (*boluk*) のあいだを結んでいた。

二 一九世紀の地誌とマハッレ

一九世紀はイスファハーンの都市史において第三期に属するが、最初にトポグラフィを再構成するのに重要な資料について解題を付しておく。

① *Mohammad Mahdi Arbab b. Mohammad Reza Esfahani, Nesf-e Jahān fi Tarīf al-Esfahān*, ed. *Manuchehr Sotūdeh*, Tehran, 1340 (以下、N.J.と略記)。

著者のモハンマド・マフディー・アルバーブはボンベイ滞在の長かったイラン人である。一八五六／五七年に帰国してから二年ばかりイスファハーンで生活した。一八五八／五九年、テヘラーンに赴き、一八八二／八三年、イスファハーン地誌の編修を命ぜられた。これは *Mer'at al-Boldān-e Nāseri* の一部となったが、後に一八八五／八六年、増補され序章と六章からなる独立の書となった。⁽¹²⁾

② *Mirza Hoseyn Khān Pesar-e Mohammad Ebrahimkhan Tahvildar-e Esfahān, Joghrafīyā-ye Esfahān*,

ed. Manūchehr Sotūdeh, Tehran, 1342 (以下、J・Eと略記)。

著者はイスファハーンの電信局 (Edāreh-ye telegrafkhāneh) の役人を務めた人物で、第一章の baladeh を一八七七年五月に書きはじめ、一八九〇年九月、これを脱稿した。つづいて第二章の qasabeh 執筆にとりかかる予定であったが、未完に終わった。イスファハーンの近郊地域を含む地誌の体裁をとっているが、実際は shahr に筆のほとんどをさき、boluk の記事は少⁽¹³⁾。

③ Pascal Coste の古地図。

Coste は一八四〇年、Flandin がフランス外務省の使節としてイランに派遣されたとき、かれに随行した建築家である。このときの旅行報告は Flandin との共著で、“Voyage en Perse” (Paris, 2vols, 1851) として出版された。のちに一八六七年、単独で “Monuments Modernes de la Perse” (Paris, 1867) を著わしたが、この中に含まれるイスラム諸建築の平面見取図は有用である。古地図もその一つで一八五〇年前後の精密な実測図として貴重である。縮尺は二五〇、〇〇〇分ノ一である。⁽¹⁴⁾

④ Sayyed Rezākhān 作成の古地図。

イラン人の手になる地図のうちではもっとも古い。一九二三／二四年に印刷に付された。原図は最初、黒の単色刷りであったが、のちに河は青、耕地、庭園は緑というように彩色が施された。縮尺は四、〇〇〇分ノ一。現在、イスファハーン大学のシャファギー教授によって八、〇〇〇分ノ一に縮められたものが利用できる。⁽¹⁵⁾

(1) 市壁と門

一九世紀の都市プランはブワイフ朝期、サファヴィー朝期の伝統をうけつゞ面もあったが、直接には一八世紀二〇年代のアフガン攻略後に築かれたきわめて小規模な第三の市壁 (Bāreh-ye Ashrafi) をもとにしていた。(↓付図Ⅰ)この点は一九世紀のトポグラフィの復原にあたってもっとも留意すべきことである。なかば神話化されたサファヴィー朝期の

イスファハーン像を無条件にあてはめ、その連続、発展と考えると、一九世紀の都市像を歪めてつかんでしまうことになる。

もっとも日乾レンガでつくられた、三つの市壁は一九世紀においていずれもほとんど崩れてなくなっていた。ブワイフ朝期のものは私有地や家になってしまい、サファヴィー朝期のものは北側が僅かに残るだけであった(JE三二頁)。したがって、一九世紀イスファハーンは厳密にいうともはや囲郭都市でなかった。NJの記述によれば、たがいに相接する家、庭園を囲む壁が代りに全体に連なって町をとりかこむようになっていたのである(NJ48頁)。

市壁の遺構はほとんど残っていないにもかかわらず、門はその機能を依然、果していた。門の数について Coste は一三、NJは一四、JEは一六の数を挙げている(NJ二三頁、JE三六頁)。三資料のあいだに数の相異があるのは、三つの市壁の存在に係する。付図IIによって門について若干、説明しよう。CosteとNJは、後者が一つだけ余計に門の名前を挙げる点を除き大きな違いはない。

さて、南に① Chahar Bagh 門と② Khaju 門の二つがあった。JEは①について何ら言及しないが、その理由は道路との関連で後述する。東に次の四つの門があった。すなわち、③ Zelleh 門、④ Karran 門、⑤ Seyed Ahmadiyan 門、⑥ Juybareh 門 (JAJの Jubareh) である。北に⑦ Tughchi (Togchi) 門、⑧ Dardasht 門 (JAJの Bab al-Dasht)、⑨ Chaharru 門 (Costeの Kiarroun) があった。Coste、NJは北の諸門に関して三つ挙げるが、JAJは⑦、⑧の二つしか列挙していない。Costeの実測した付図IIには、名前が記されていないが⑦と⑧、⑧と⑨のあいだにそれぞれ門があったようであり、北の門は全部で五つあったのである。西には五つの門があった。すなわち、⑩ Bridabad 門、⑪ Juzdan 門、⑫ Seh Pelleh 門、⑬ Marnan 門、⑭ Alyaran 門である。

結局、CosteとNJはサファヴィー朝期に建設された市壁の門についてだけ誌すが、JEはこれ以外にアフガン支配期に築かれた市壁の門、その他を列挙するのが特徴である。すなわち、⑮ Hasanabad 門と⑯ Doulat 門はアフガン支配

期のもの、⑰ *Nou* 門はブワイフ朝期のもの、⑱ *Saruj* 門は位置の比定ができない⁽¹⁶⁾。JEは他の資料と較べて一九世紀の状況を忠実に反映しているといえることができる。

(2) 道路

一九世紀のイスファハーンがアフガン支配期の市壁を核に構成されていたことは、道路の配置状況から傍証できる。これをサファヴィー朝期との比較で述べてみることにしよう。

サファヴィー朝期の市街を南北に貫ぬく幹線道路は、*Chahār Bāgh-e Shāh 'Abbāsī* であった。これはザーヤンデルード河にかかる「三十三橋」(*Pol-e Si o Seh*) を境に二つの部分にわかれていた。北側は *Chahār Bāgh-e Pā'in* と呼ばれ、付図IIによると一九世紀半ばは *Chehel Sotūn* 宮の西で終わっているが、サファヴィー朝期はこれより北に延び、*Tughchi* 門に達して郊外に出ていた。

南側は *Chahār Bāgh-e Balā* と呼ばれ、ザーヤンデルード河の南、ソッフエ山の麓にまで達していた (JE二六頁)。この部分が建設されたのは南の郊外の開発に由っていた。この時期に農業経営の一環として庭園、果樹園がさかんにつくられ、サファヴィー王家も別荘を兼ねた庭園 *Hazar Jarib* をつくった。一七〇〇年頃にはシャー・ソルターン・ホサインが西南郊に *Farahābād* を建設した (→付図II)。これら庭園、果樹園を市街地に結びつける交通、輸送手段としてこの道路は建設されたのである⁽¹⁷⁾。

ところが、この道路は一九世紀にサファヴィー朝期の旧市街地の縮少がすすみ、新市街地がアフガン支配期の市壁を核に再構成されてくると荒廃した。JEに *Chahār Bāgh* 門の言及が欠けるのはこのことと無関係でない。そして、新しい幹線道路がアフガン支配期の市壁の門を通るように建設されてくるのである。これがイスファハーン州政庁のワジールであった *Hājī Mohāmmad Hoseyn khān* の建設した *Chahār Bāgh-e Šadrī* である。(Z一四三—一四四頁) (→付図II)。

この新しい道路は旧道よりも東寄りにつくられた。その起点は南のシーラーズ方面から来る街道が河を渡って最初に達する *Khaju* 門であった。ここから北に幅の広い直線道がアフガン支配期の市壁に設けられた南門 \parallel *Hasanabad* 門に延びていた (NJ二九一—三〇頁)。ここで *Chahar Bagh* 自体は終わっているが、これに連続して北に走る道路が実は一九世紀の市街を南北に縦貫するメインルートであったのである。 *Hasanabad* 門から *Chaharsuq Naqasi* と *Chaharsuq Maqsud* の二つの小バーザール地区の狭い道を通りぬけていくと新メイダーンの東南隅に出る。ここを経て大バーザールのまがりくねった道を北東にいけば、古メイダーンに出ることができ、さらに北すれば *Tughchi* 門に達して、「チャールバーゲ・トゥーグチー」 (*Chahar Bagh-e Tughchi*) という幅員の広い道路に通じていた (NJ二四、三〇頁)。あとひとつ、 *Kheyaban-e Khoshk* 建設の例も一九世紀の市街地がアフガン支配期の市壁を基礎にしていた証拠として挙げることができる。この道路はアフガン市壁の西門 \parallel *Doulat* 門から西にのびていた。サファヴィー朝期の建設にかかるともいわれるが、一九世紀には荒れるにまかせられていた。これをイスファハーン州知事ゼッロール・ソルターンが水路をつくり、植樹して復興したのである (NJ四八—四九頁)。

ところで、ペルシャ語史料は道路について三つの術語を使い分ける。第一は *kheyaban* である。NJによれば「長く幅の広い、まっすぐな道」のことで、「大通り」に相当する (NJ四八—四九頁)。第二は *Chahar Bagh* だ、これも大きくみれば *kheyaban* の範疇に入れることができるが、*kheyaban* より幅員が広く、両側に並木、庭園、果樹園のあるところが違っていた。中央部分には石を敷きつめた道がとくに設けられていた。イスファハーンでは南北に縦貫する新旧二つの *Chahar Bagh* があったのである。

最後に *Kücheh* (小路) がある。NJに「市街地 (*Shahr*) は *Kücheh* によって区切られ」「家とその (入口の) 戸は、大部分、この *Kücheh* にそってある」 (NJ四八頁) と書かれているように、*Kücheh* はイスファハーンの生活空間 \parallel マハッレを区切る重要な機能をもっていた。これは通り抜けのできるものと、行きどまりのもの (*Kücheh-ye*

monsaddah) の二種類に分けられていた。後者は *sibeh* とはいわれ、トルコ語起源の言葉で「閉じた戸」(*divare bast*) のことを意味していた。*sibeh* は、夜とか治安の悪いとき、通りの端にある門を閉めれば安全な空間 (*mahall-e mahfuzi*) を確保できるという点で自衛機能を備えていた。したがって、*sibeh* に沿って建てられた家の評価は、他のどれよりもイスファハーンでは高かったのである (NJ 四八頁)。

(3) マハッレとその荒廃

Coste、JE、NJ の三資料は一九世紀マハッレに関する情報を若干ではあるが伝えている。Coste はみずから実測した地図の中にマハッレの名前、位置を書きこみ、地図の脇に各マハッレの戸数、ユダヤ人については人数を概略で示した。二五のマハッレを列挙している。JE は三六のマハッレとその長である *kadkhoda* の名前を挙げ、簡単な解説を加えた。

この二つはマハッレに関して十分、信頼に値する資料であるが、NJ はマハッレに関するかぎり、一九世紀の実態を反映させたものとは思われない。三七の「登録されたマハッレ」 (*mahallat-e mazbuteh*) の名を列挙するにもかかわらず、その名から推していずれもサファヴィー朝期の登記簿 (*ragabeh*) の引写しにしかすぎないからである。⁽¹⁸⁾

Coste、JE に拠って一九世紀のマハッレに関していくつかの問題点を述べることにしたい。最初に二資料を比較対照した付表 I を巻末に掲げる (JE 三一―三三、一二五―一二六頁)。

さて、JE はマハッレの状況を①人が住んでいるもの、②まったく荒廃してしまったもの、③居住と荒廃とが混在するものの三種類に分けたあと、次のようにいう。

「現在、人が住んでいようといまいと三六のマハッレがある。耕地として保たれているものもあるが、あれて荒廃地のまま放置され、まだ耕地になっていないものもある。現在、人が住み、*kadkhoda* が支配するマハッレは三一である」 (JE 三二頁)。

これによって三六のマハッレのうち五つが完全に荒廃していたことが分る。付表Ⅰから荒廃したマハッレの名とその番号、および記号をひろい出し、J E、その他によって適宜、説明を付け加えるならば次のとおりである（↓以下、付図Ⅱを参照）。

[27] — O || Mostahlak カージヤール朝初期に荒廃した。多くの家が残っているが、すぐ北の Shamsabad のマハッレに合併された (J E 三三三頁)。

[28] — P || 'Abbasabad これが開発された経緯について J E は次のように説明する。

「サファヴィー朝後期、(イスファハーンの戸数は) 二〇万戸であったといわれる。各戸はそれぞれ家を構えていた。シャー・アッバースの治世に居住空間の狭さが上訴された。それによると一部屋に二五人もの人たちが寝起きしていた。そこで 'Abbasabad 地区の建設が命ぜられた (J E 三一頁)。

しかし、J E が執筆された当時、このマハッレは荒廃して数軒の家が残っているにすぎず、kadkhoda はいなかった (J E 三三三頁)。

[29] — Q || Charhab J E は昔に荒廃したというだけで、時期を明示しないが、Athar は荒廃の開始をアフガン支配期とみる。Coste は完全な荒廃でなく、一部の荒廃だと説明する。⁽¹⁹⁾

[33] || Feltechi Coste に見出せないが、Athar は町の北東部、セルジューク朝期の Tugchi 地区の続きだという。アフガン支配期⁽²⁰⁾に荒廃した。

[36] — @ || Farahabad サファヴィー朝のシャー・アッバースは、'Abbasabad を開発しても人口の増加に追いつかないためザヤンデルド河の南に新地区を建設した。カージヤール朝前半期のファトフ・アリー・シャーの治世からモハンマド・シャーの治世にかけてはまだ、一、〇〇〇〇戸の家があったが、その後、災害とペストによってその半分以上がなくなってしまった (J E 三一頁)。

以上が完全な荒廢の例である。部分的な荒廢に関しては Coste から判明する。それは R、M、N、Q、S、T の六つである。Q は JE の [29] にあたるので実質は五つということになる。荒廢した戸数、残存戸数は付表の通りである。S、T はとくに荒廢がいちじるしく、それぞれ一、〇〇〇戸が廢屋となった。残存戸数は N の六〇〇戸を除き、平均二〇〇—三〇〇戸台で少なかった。⁽²¹⁾

以上、完全に、あるいは部分的に荒廢したマハッレの分布を考えてみると、[29]—Q、[33]を除く八つがザーヤンデルド河の北側にあつてアフガン支配期にできた市壁の外のほぼ東南、西に位置していたことがあきらかになる(付図Ⅱ)。このような荒廢化によつて一九世紀の市域は、サファヴィー朝の盛時にくらべ $\frac{1}{3}$ に縮少してしまつた。JE は次のように誌す。

「昔、市街地の周囲は一二ファルサングあつた。今、マハッレのうち(南)端にある多数の荒廢地がならされ、耕地(Keshizar)になつた。建物のあとも残っていない。今、町の周囲は四—五ファルサングをこえない(JE 一七頁)。

(4) 荒廢したマハッレの農地化

荒廢による市街地縮少の原因は、一八世紀末から一九世紀七〇年代におきた一連の戦役、自然災害、暴動であつた。そのいくつかを挙げると、一八世紀末におけるイランの支配権をめぐるおきたカージャール族とザンド朝との間のイスファハーン攻防戦、一八三〇年代のモハンマド・シャアの治下におきた飢饉⁽²²⁾、そして、ナーセル・オッ・ディーン・シャアの治世初年の一八五〇年前後におきたルーティの暴動である(JE 三二頁)。これらによつて荒廢は市街地にとどまらず、郊外の村落にも及んだ。ナーセル・オッ・ディーン・シャアの治世初期においてイスファハーン周辺にあつた一、〇〇〇にのぼる村落とその枝村(mazra'eh)は、ほとんど放置されたままであつた⁽²³⁾という。

イスファハーンの市街地と郊外の農村の荒廢を決定づけたのは一八六九年から一八七二年にかけておきた大飢饉である⁽²⁴⁾。これが直接的には JE の記述するような荒廢と市街地縮少をひきおこしたといふことができる。

ところで、以上のような荒廢化がイスファハーンの都市社会においていかなる結果をもたらしたのであるうか。これにかんして次の二点を考えなければならぬ。第一は荒廢した市街地の農地化の問題、第二は縮少した市街地におけるマハツレ再編成の問題である。前者は地主制(マーレキー・ライイヤット制)成立との関連でみていくことが必要である。

荒廢した国有地(*khāleseh' pl. khālesejāt*)を復興させるためにカージャール朝政府は、当初、有力者に賃貸する方法をとった。一九世紀前半、ファトフ・アリー・シャールのワジールであったサドレ・アミーン、次いでアミーノッ・ドウレが、安い賃貸料で国有地を借り、農業経営をおこなった。しかし、このような借地経営は揺れ動く政治状況に左右されやすく、借地権も安定せず、両者ともに没収という結果に終わった。⁽²⁵⁾

一八五〇年代、ナーセル・オッ・ディーン・シャー治世の初期に私有地の復興のために州政府のモバーシエルは、村民に種子を提供した。⁽²⁶⁾ 同じころ、荒廢した村落の立直しのためイスファハーンの出納長をしていたミールザー・アブドル・ホセインに復興資金を前貸したが、所期の目的に使われず武器購入に流用され、反乱が勃発した。⁽²⁷⁾

荒廢地の復興策は、それが国有地であれ私有地であれ思うような成果をあげることができなかった。一八七四／七五年、大飢饉のあとをうけてイスファハーン州知事に任命されたゼッロル・ソルターンは、テヘランの中央政府に国有地(*khālesejāt*)を一〇年間のムカーターに出すことを提案した。⁽²⁸⁾ これはアミーノッ・ソルターンのワジール在職時代(一八八八—一八九六)に実施された国有地の払下げ政策に直接、つながっていった。払下げられた国有地は *khālesejāte entegāri* と呼ばれ、まだ種々の点で私有権に制限があったが、払下げの措置が二〇世紀以降の地主制成立の重要な挺子になったことは疑いのない事実である。⁽²⁹⁾ 一八九六年、モザッファル・オッ・ディーンが即位したとき、イスファハーン地方に残る国有地はバラアン地区^{ボラン}の荒廢した村落だけであった。⁽³⁰⁾

国有地の払下げは荒廢地の耕地化に大きな弾みをつけた。この動きは荒廢していた市街地のマハツレにも及んだ。前述したようにJEは、一九世紀に市街地の縮少したことを述べつつ、荒廢地が耕地(*kesizār*)になったと誌している。一九

二三—二四年に作成された Sayyed Reza Khān の地図によると、荒廢したマハッレである Mostahlak 'Abbāsābād' Charhāb がそれぞれ一面、果樹園 (baghat) と耕地 (mazra'eh) でおおわれていることに気づく。このような極端な都市の農村化は、実は商人 (tājer) の強い土地所有への願望に支えられていた。たとえば、Ansari が「商人たちは、地主の息子に自分の娘を嫁にやろうと心がけていた」⁽³¹⁾ というのは、この事実を端的にものがたる。同様に J E は、商人の地主化を次のように一般的に説明する。

「商人はこの町に多く、みな織物、商品取引にしたがっているが、近年、そのほとんどが農業に手をそめ、土地所有 (molkdari) をおこなっている」(J E 九二頁)。

以上、地主制の成立過程でおきた商人の地主化の現象は、荒廢したマハッレを耕地にかえ、果樹園にしていくという動きにつながっていった。イスファハーン地方全体の荒廢によって生じた市街地の縮少は、その後の復興の兆しのなかで再び都市化をはかるという方向にすすまず、地主制と結びつき農村化していったことができる。

(5) マハッレの再編成

付表 I によって具体的な事例をみていくと、Coste の L、R の二地区の統合がある。Coste が調査した一八五〇年前後は二地区がそれぞれ独立していたが、R の一部荒廢化により J E の執筆された一八七〇年代以降、ひとつのマハッレになった。このことは L、R に対応する J E の [20]、[21] をみれば分る。二つの地区名がまだ残っているが、一人の Kadk-hoda が両方の地区を管轄していることによって実質的には統合されていた。このような例として N ↓ [24] + [25] を指摘することができる。この場合も実質的な統合があったにもかかわらず、新地区名が決定せず、両方併記されている。

J E の側から統合の例をみると、① [2] + [3] ↓ B、② [4] + [5] + [6] ↓ C、③ [9] + [10] + [11] ↓ F、④ [26] + [27] ↓ O の四つの例を挙げることができる。いずれも Coste において一つの新区名が表記されているので、前述した二例よりも早く一八五〇年前後には統合が終っていたのであろう。

統合とは反対にマハッレが分化、ないしは新しくできた例がある。①G↓[12]+[13]、②J↓[17]+[18]の二つの例である。これらは両方とも大バーザールに比較的近く位置するマハッレであるが、一八七〇年代にイスファハーン州知事ゼッロル・ソルターンのおこなった次のような復興政策が影響しているのであろうか。すなわち、

「王の広場、四つの池、店を再建した。まったく人がいなくなっていたが、誘致して住まわせるように命じた。勅令が出され、ハーレセ財産 (ragabeh) の一部であった広場周辺のバーザールのいくつかを選び、手工業者を連れてきた。

いつがせるために店の $\frac{1}{3}$ をかれらに無償で与えた。しかし、政府は建設代金として一ディーナールもとらなかつた」。

J Eの③—④、⑤—⑥は一八七〇年代以降に新しくできたマハッレである。[34]ができた意義は次節で触れるが、[35]につ

いて注意すべきことはこのマハッレの長が kadokhoda ではなく kalantar と呼ばれている点である。[35]の Yazdābād 地区は Coste の地図にもみられず、その位置は J と M との中間地域であったと考えてよい。

kalantar は、フロアーの研究によれば一九世紀イランの諸都市においてもっとも重要な地方役人であった。タブリーズであればドンボリー家、シーラーズならばカヴァーム家のような名家出身のものが代々、世襲的にシャーによってこの職に任命されていた。カージャール朝の一族分封政策によって地方行政の実権は、州知事と州政府のワジールに握られるようになったとはいえず、kalantar は依然、在地勢力を代弁する、いわば市長に相当する職であった。その職務は警察権力を背景とした公共秩序の維持、裁判権の行使、公定価格の決定、地区の kadkhoda の任命、ギルド単位に租税負担額 (boniche) を割当てることなど、であった。⁽³³⁾

kalantar は本来、このように高く位置づけられていたにもかかわらず、J Eでは kadkhoda と同格にされ、マハッレの長とされているのはいかなる理由によるのであろうか。ラムトンはこの点について kalantar の地位が低下し、イスファハーンでは darūgha にとって代られたからだという解釈を示した。確かに J Eの伝える Aqā Mohammad Sādeq という darūgha の話はこのような側面を明らかにしている。彼は三〇年もの間、この職につき町のことなら何でも知悉

する人物であった。マハッレのすべての *kadhoda* がかれの支配下にあり、四〇—五〇人の直接の部下を自分のまわり
に置いていた。昼間は新メイダーンの北端、大バーザールの入口にあたる *qaysariyeh* の石のベンチに腰かけ、手には
棍棒とむち打ちのための道具をもっていた。ここは *darughā* が罪人を法的に処罰する重要な場所であった。夜は大バー
ザール内の *Chaharsūq-e Shah* に陣取り、夜警に巡回場所を割当てた。 *darughā* 自身、部下の *nā'eb' farrash* とし
っしょに毎夜、二、三のマハッレの *kucheh* を見回った。盗み、不法行為などはまず、夜警、ないし昼間の番人 (*pakar*)
から各地区、大バーザールの *kadhoda* に伝えられ、やうにかれらから *darughā* に逐一、報告された。 *darughā* はその
あと州政庁、州知事へ伝えるという報告系統ができあがっていた (*J E* 一二五頁)。

しかしながら、フロアーはラムトン説に反対する。かれは *darughā* の権力が、大バーザールの治安維持を主体にした警
察権に限って *kalantar* の権力を凌駕したにすぎず、また、イスファハーンの状況は例外現象だと主張する。⁽³⁵⁾ だが、フ
ロアーの説はなぜイスファハーンだけ例外であったのか説明不足であり、この点は *kalantar* が *Yazdābād* 地区をとく
に管掌する問題も含めて *kalantar* の記事がまったくないために未解決のままである。

この他、マハッレについて補足すれば、新しくできたものでないが *J E* にあって *Coste* にはないものが二つある。[14]—
②の *Darb-e bagh-e hajji* と^[22]—③の *Ahmadābād* である。前者は *Bīdābād* 地区の東、*Darb-e Kūshek* 地区の北、⁽³⁶⁾
付図Ⅱの O、K、G に囲まれた所である。後者は付図Ⅱにおいて新メイダーンと J とを結んだ中間地点にある。

以上、マハッレに関して整理すれば、*J E* が三六、*Coste* が二五のマハッレの数を列挙していたが、荒廃、統合、分化
などを勘案すれば両者の比率は二三対二〇ということになる。一八五〇年代から七〇年代にかけてマハッレは三つ増えた
ということになるであろう。

註

(1) ギルドの研究動向として坂本勉「近代イスラム・ギルドについての覚書」(『オリエント』二二—二)を参照。イスファハーンのバーザール研究として次の二つがある。① H. Gaube und Eugen Wirth, *Der Bazar von Isfahan* (Wiesbaden, 1978). ② A. Bakhtiyar, "The Royal Bazar of Isfahan", *Iranian Studies*, Vol. VII (1974), 320-347.

①はキャラバンサライを含むバーザールの諸建築、施設の建築学的な実態調査の集成である。②はバーザールを一般的に概観したものである。イスファハーン以外の都市におけるバーザールの理論研究、あるいはフィールド調査の最新の成果としては、左記のものが代表的なものである。

E. Wirth, "Zum Problem des Bazars (Sūq, carşi), *Der Islam*, Vol. 51 (1974), 203-260, Vol. 52 (1975), 6-46.

G. Schweizer, "Tabriz (Nordwest-Iran) und der Tabrizer Bazaar," *Erkunde*, Vol. 26 (1972), 32-46.

P. Centlivres, *Un Bazaar d'Asie Centrale. Forme et organisation du bazar de Tashqurghān (Afghanistan)* (Wiesbaden, 1972).

C. J. Charpentier, *Bazaar-e Tashqurghān*, (Uppsala, 1972). 真田安「オアシス・バーザールの静態的研究」(『中央大学大学院研究年報』六〇)は一九世紀カシュガルのバーザールを歴史的に考察した非常にすぐれた研究である。加納弘勝「イ

スラムの生産者都市ブハラ」(林武編『発展途上国の都市化』、アジア経済研究所、一九七六年)、小松久男「ブハラのマハラに関するノート」(『アジア・アフリカ言語文化研究』一六)の二研究はいずれもソビエトのスハールワ女史の中央アジア都市研究を詳細に紹介したものであるが、バーザールについても示唆をうけるところが大きい。

(2) H. Gaube, *Iranian Cities* (New York, 1979), p. 67.

(3) *Ibid.*, p. 68.

(4) *Ibid.*, p. 77. 古メイダーンは付図Iにおいて、取壊したあとにできた meidān-e qadim のあたりに位置していた。

(5) *Ibid.*, p. 69.

(6) *Ibid.*, pp. 83-85.

(7) *Ibid.*, pp. 71, 78.

(8) *Ibid.*, p. 82.

(9) *Loc. cit.*

(10) *Ibid.*, pp. 83, 85.

(11) *Ibid.*, p. 95.

(12) Ч. А. Стори, Персидская литература, Био-библиографический обзор, перевел с английского, переработал и дополнил Ю. Д. Бререль, часть II, стр. 1012 (Москва, 1972), З. П.序論。

(13) JE 一一七四、一三一頁。

(14) S. Shafaqi, *Joghrafyā-ye Esfahān* (Enteshārāt-e Dāneshgāh-e Esfahān, 1353), p. 317.

F. Bémont, *Répertoire analytique et critique de 225*

ouvrages relatifs à l'Iran (Paris, 1973), p. 354. Coste

- (15) S. Shafaqi, *op. cit.*, p. 319. なお、地図の借用と写真撮影にかんしては、大阪外国語大学の岡崎正孝教授、平凡社編集部、三浦徹氏の御好意によるところが大きい。深く感謝の言葉を申し上げたい。

- (16) Sārūj 門はイスファハーンの古い門の一つで、一九世紀以前に見ら出られる Sārūyeh 地区にあったとされる (→ Abū alQāsem Rafī'i Mehrābādī, *Āthar-e Mellī-ye Eşfa-hān* (Tehran, 1352), p. 114 [図]、*Āthār* 七巻目)。

- (17) L. Lockhart, "The City of Isfahan in the First Quarter of the Eighteenth Century," in *The Fall of the Safawi Dynasty and the Afghan Occupation of Persia* (Cambridge, 1958), appendix III, pp. 478-484.

- (18) S. Shafaghī, *op. cit.*, p. 248.

- (19) Coste, 同図。

- (20) *Āthār, op. cit.*, p. 255.

- (21) Coste. 同図。

- (22) ラムトン著、岡崎正孝訳『ペルシヤの地主と農民』(岩波書店、一九七六)、一四八頁。

- (23) 同前、一五六頁。

- (24) 同前、一五七頁。

- (25) 同前、一四八頁。

- (26) 同前、一四八頁。

- (27) 同前、一五六頁。

- (28) Anṣārī (Moḥammad Ḥasan Jaberī), *Tārīkh-e Eşfa-hān o Rey o Hameh Jahān* (Tehran, 1321), p. 54.

- (29) ラムトン、前掲書、一五六頁。

- (30) 同前、一五七頁。

- (31) Anṣārī, *op. cit.*, p. 54.

- (32) *Ibid.*, p. 55.

- (33) W. M. Floor, "The Office of Kalāntar in Qājār Persia," *JESHO* 14 (1971), pp. 253-263.

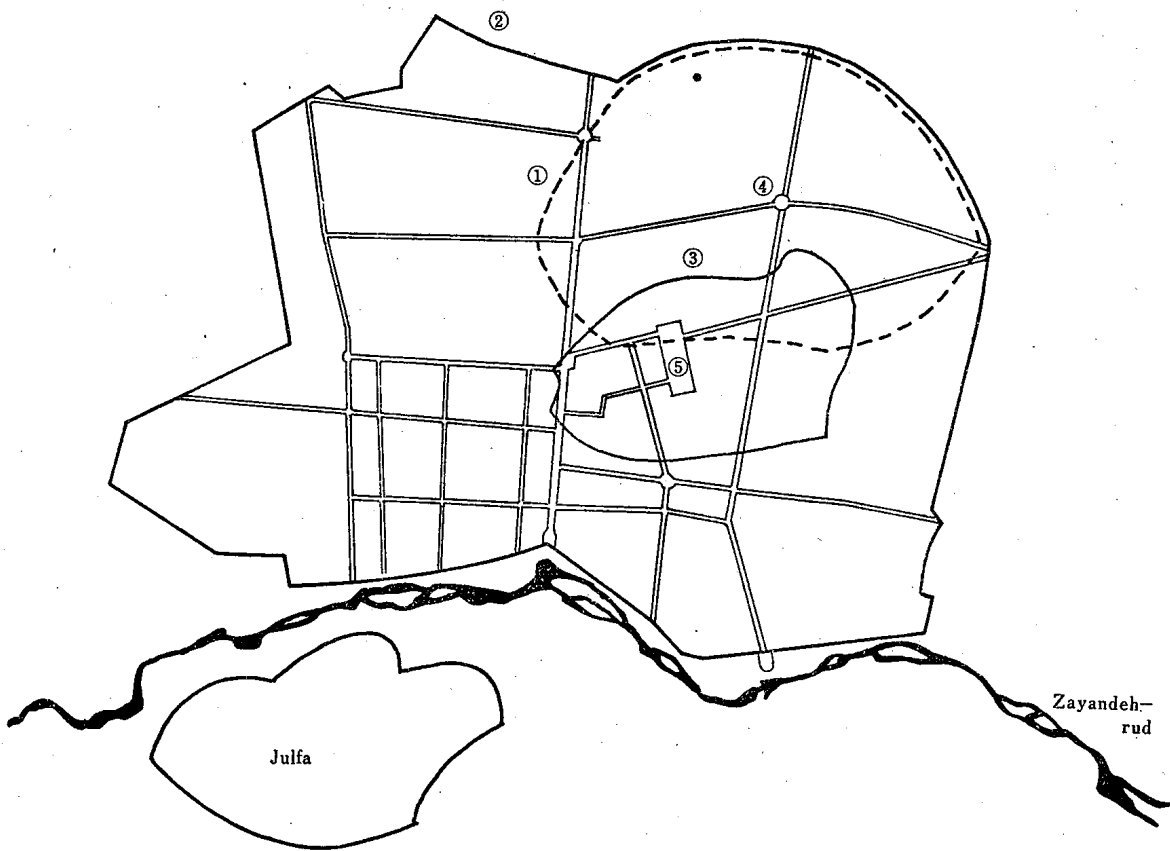
- (34) A. K. S. Lambton, "The Office of Kalāntar under Safawids and Afshārs," in *Mélanges d'Orientalisme offerts à Henri Massé*, Tehran, 1963, pp. 208-218.

- (35) W. M. Floor, "The Market Police in Qājār Persia," *WI* 14 (1972), pp. 219-220.

- (36) *Āthār, op. cit.*, pp. 181-2, 189.

付図Ⅰ イスファハーンの市壁と都市発展

史
学
第五〇号
記念号



- ① Bāreh-ye A'zd al-Douleh
- ② Bārū-ye Tahmūrjī
- ③ Bāreh-ye Ashrafi
- ④ Meidān-e Kohneh
- ⑤ Meidān-e Shāh

〔出所〕 Shirūs Shafaghī:
Joghrafiyā-ye Eṣfahān,
Eṣfahān, 1353.

付表 I 19世紀イスファハーンのマハッレ

記号	Coste のマハッレ (戸数)	
A	Dervazeh-i No	500 戸
B	Der Decht	700戸 (ムスリム) +40人 (ユダヤ人)
C	Hussein-abad	900戸 (ムスリム) +30人 (ユダヤ人)
E	Djoubāreh	
D	Gaoudi-Makousoud-Beg	250戸 (ムスリム) +50人 (ユダヤ人)
F	Bid-abad	
		1,350戸
G	Derkouchik, あるいは Der-i Mesdjid-i Hakim	700戸
①		
H	Nimaver	200戸
I	Meidān-i Kohneh	350戸
J	Meidan-i Mil あるいは Seid-Ahmedioun	500戸
K	Mahalle-i No あるいは Bagh-i Mourad	500戸
L	Mahalleh-i Baghat	350戸
R	Pa-Kalaa	200戸, その他は荒廃
②		
M	Kiarroun	300戸, その他は荒廃
N	Louban と Tcharsou-i Chiraziha	600戸, あとの400戸は荒廃
O	Chems-abad	
P	Abbas-abad	かつては1,200戸。今は荒廃。
Q	Tcherkh-āb	50戸。あとの1,200戸は荒廃。
S	Talvaskoun, あるいは Telli-Oustoukhan	300戸。あとの1,000戸は荒廃。
T	Khadjou	250戸。あとの1,000戸は荒廃。
U	Djamala-Koula	350戸
③		
④		
⑤		
V	Djoulfā	
X	Marnoun	
Y	Sitchoun	
Z	Hussein-abad	

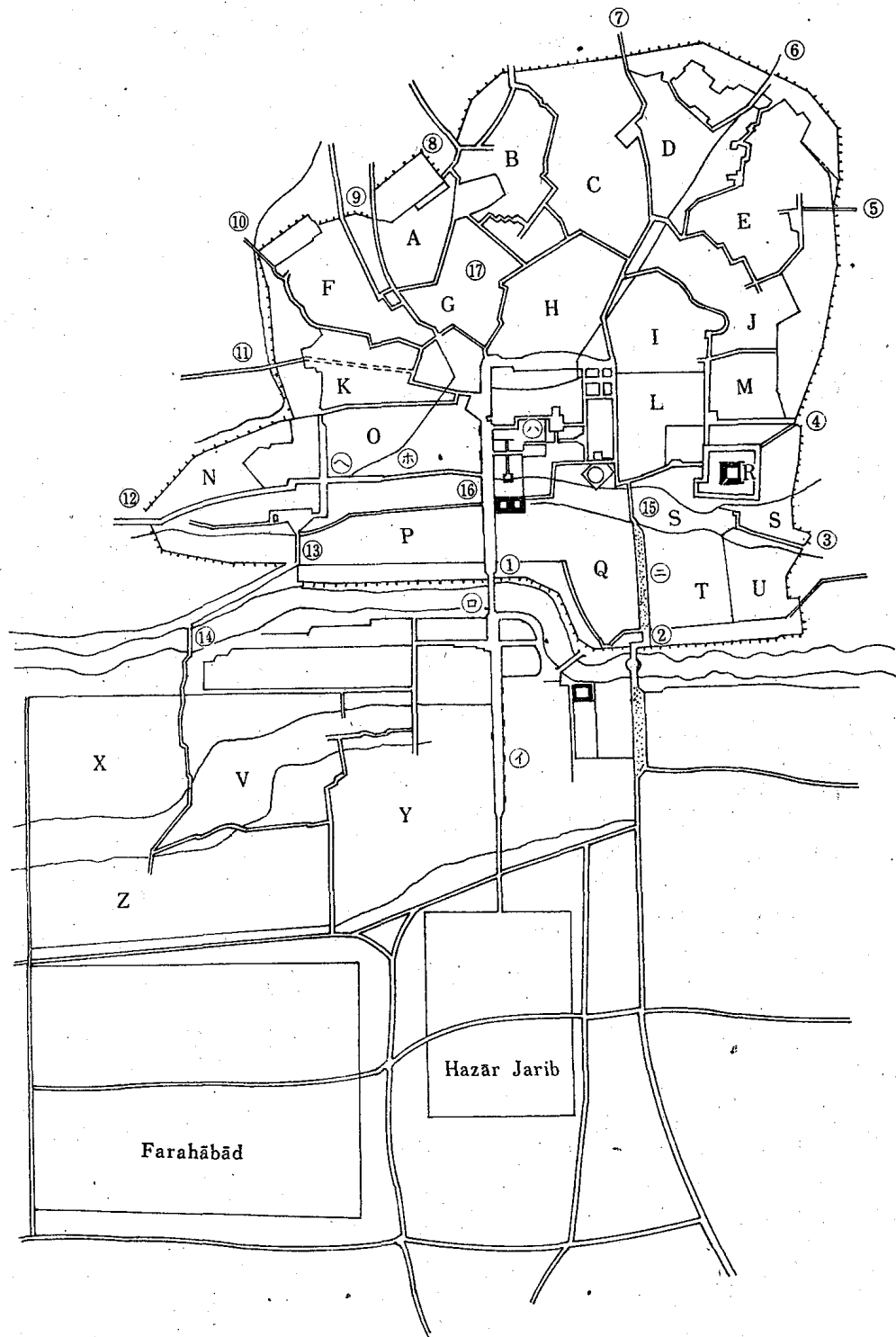
一九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン (I)

付表 I 19世紀イスファハーンのマハッレ

番号	J E の マ ハ ッ レ	kadkhodā
1	Darvāzeh-ye Nou	Mashhadī Moḥammad
2	Darb-e Dasht	Āqā Rajab'ali
3	Darb-e Emām	
4	Shāh-e Shāhān	
5	Ṭoqchi	Āqā Moḥammad Kāẓem
6	Bāgh-e Shahīl	Āqā Moḥammad Javād
7	Lotūr-e Jūbāreh	
8	Gaūd-e Maqṣūd Bik-e Jūbāreh	Āqā Moḥammad Ḥasan Jūbāreih
9	Bidābād	Āqā Moḥammad Ḥasan
10	Sha'ish-e Bidābād	
11	Sheykh Abū Mas'ūd	
12	Darb-e Kūshek	Asūd Āqā Moḥammad Hāshem
13	Darb-e Masjed-e Ḥakīm	Āqā Moḥammad Qāsem
14	Darb-e Bāgh-e Ḥājji	Āqā Hoseyn Valad-e Āqā 'Ali Qazvinī
15	Nimāvārd	Āqā Moḥammad Ebrāhim
16	Meidān-e Kohneh	Āqā Ramaẓān
17	Meidān-e Mir	Āqā Moḥammad Hoseyn Āqā 'Ali Akbar
18	Seyyed Aḥmadiyahān	
19	Nou	Āqā Ali
20	Bāghāt (Qaṣr-e Monshī)	Āqā Aḥmad Pahlavān
		Āqā Moḥammad Hoseyn Āqā Samād
21	Pā Qaleh	Āqā Aḥmad
22	Aḥmadābād	Āqā Aḥmad Panjāhbāshī
23	Karrān	Ḥājji Moḥammad Ḥasan
24	Lonbān	Mashhad Hoseyn'ali
25	Chahārsūq-e Shīrāzihā	×
26	Shamsābād	×
27	Mostahlak	×
28	'Abbāsābād	×
29	Charḥāb	Āqā Moḥammad Esma'il
30	Telvāskān	Āqā Aḥmad Khājū'i
31	Khājū	Āqā Moḥammad Hasan Jamāleh Kaleh
32	Jamāleh Kaleh	×
33	Felfelchī	×
34	Jūzdān	キヤドホダーはいない、定住ロール
35	Yazdābād	Kalāntar
36	Farakhābād	×

付図Ⅱ 19世紀イスファハーン略図

一九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン (I)



- | | | |
|---|----------------------------|----------------------|
| ① | Chahār Bāgh-e Shāh 'Abbāsī | (出所) |
| ② | Pol-e Si o Seh | Shirūs Shafaghi |
| ③ | Chehel Sotūn 宮 | Joghrafyā-e Eṣfahān, |
| ④ | Chahār Bāgh-e Sadri | Eṣfahān, 1353. |
| ⑤ | Kheyābān-e Khoshk | |
| ⑥ | Chahārsūq-e Shirāzihā | |